きやうはたかつきにてすふるなり、たかつきのすへやう一人のまへに三本なり、略○中

大將あるじの事

だいきやうのをんざとは、ことはてゝおほゆかにおりゐて、かうぶつとて、つちたかつきををしきにしたるさかなくだものをまいらせ、又いもがゆなどまいらせて、さいばらあなたうとなどうたひ、略○下

〔厨事類記〕樣器具

土高坏十二本或本六塗胡粉雲母、或畫松鶴、

〔門室有職抄〕人々差酒飯儀

至極饗應之時、高坏十二本備也、其時必用打敷高坏、次八本、次六本、次四本、次三本云々、普通高坏用之、

〔調度口傳〕一丸高坏の事

黑塗蒔繪等なり、古は膳部ニ用、五本立七本立ト云、當時菓子臺ニ用ゆ、

一角高坏の事

丸ニ同じ、又入用も有、

〔今昔物語ニ十二〕高藤内大臣語第七

今昔、略○中良門ノ内舍人ノ御子ニ高藤ト申ス人御ケリ、略○中庇ノ方ヨリ遣戸ヲ開テ、年十三四許有ル、若キ女ノ薄色ノ衣一重、濃キ袴著タルガ、扇ヲ指隱シテ、片手ニ高坏ヲ取テ出來タリ、略○中高坏折敷ヲ居テ、坏ニ箸ヲ置テ持來タル也、

〔台記別記〕久安六年三月三日庚辰、三月三日御節供事、重方調進之　土高坏十二本以金青畫松鶴

〔玉海〕承安二年八月廿一日丁巳、此日小童有著袴事、略○中當日先居饗饌、判官代能業奉行之上達部座、朱塗高